

2024. 3. 29

【日本鉱工業生産（24年2月）】

自動車の工場稼働停止の影響が長引く

～3, 4月は反動増、その後も均せば回復を予想～



フェローチーフエコノミスト

小玉 祐一

ポイント

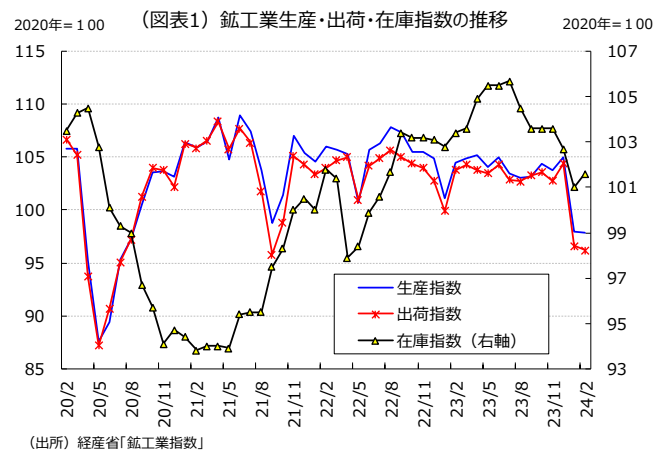
- 2月の鉱工業生産指数（季調値）は前月比▲0.1%の小幅マイナスとなり、一部自動車・自動車部品メーカーの不正問題に伴う工場稼働停止の影響が尾を引いている様子を示した
- ただ、3, 4月は高めの伸びが実現するとの予測が示されている。底堅い世界景気、国内物価のピークアウト、設備投資計画の進捗もあり、年後半にかけても均せば回復傾向が続くと予想する

1. 不正問題の影響が尾を引く

2月の鉱工業生産指数（季調値）は前月比▲0.1%の小幅マイナスとなり（図表1）、同+1.3%だった市場予想を下回った。自動車工業が大幅マイナスとなり、一部自動車・自動車部品メーカーの不正問題に伴う工場稼働停止の影響が尾を引いている様子を示した。経産省の基調判断は、前月7ヵ月ぶりに下方修正した「生産は一進一退ながら弱含み」が維持された（図表2）。

業種別に見ると、主要15業種中7業種が前月比マイナス、8業種がプラスとなった。業種の数で言えば、低下した業種より上昇した業種の方が多い。マイナス寄与が大きかった1位の業種は自動車工業（前月比▲7.9%、寄与度▲1.01%ポイント）、2位の業種は生産用機械工業（同▲3.2%、同▲0.28%ポイント）、3位の業種は輸送機械工業（除.自動車工業）（同▲8.3%、同▲0.24%ポイント）という順である。自動車工業だけで約1%の押し下げ要因になっており、もし自動車工業が横ばいだったら、鉱工業生産は1%前後のプラスとなっていた計算である。

自動車工業の内訳を見ると、普通乗用車が前月比▲7.7%、普通トラックが同▲17.8%、軽乗用車が同+1.9%という結果となっている。渦中の軽乗用車は伸びて



(図表2) 鉱工業生産の基調判断の推移

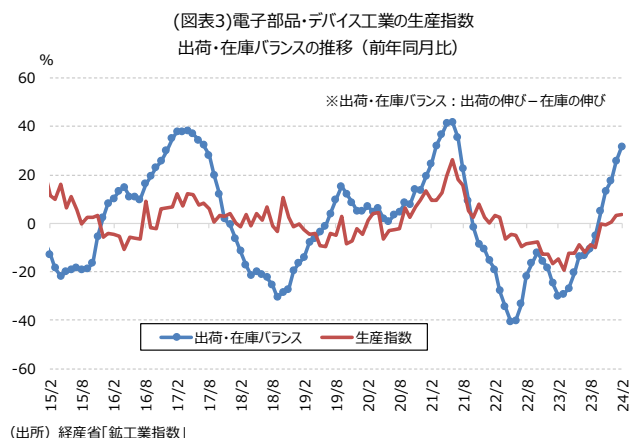
	基調判断	方向性
20年8月～21年7月	生産は持ち直している	↑
21年8月～10月	生産は足踏みをしている	↓
21年11月～22年3月	生産は持ち直しの動きがみられる	↑
22年4月	生産は足踏みをしている	↓
22年5月	生産は弱含み	↓
22年6月～7月	生産は一進一退	↑
22年8月～9月	生産は緩やかな持ち直しの動き	↑
22年10月	生産は緩やかに持ち直しているものの、一部に弱さがみられる	↓
22年11月～23年2月	生産は弱含み	↓
23年3月～6月	生産は緩やかな持ち直しの動き	↑
23年7月～12月	生産は一進一退	↓
24年1月～	生産は一進一退ながら弱含み	↓

(出所) 経産省「鉱工業指数」

いるが、1月が同▲36.9%の大幅減産だったという理由が大きく、12月との比較ではまだ▲35.7%の大幅マイナスである。報道によれば、一部の自動車メーカー、同部品メーカーからは、能登半島地震の影響で部品供給がいまだに滞っているとの声も上がっている。

2. 半導体製造装置が大幅減だが

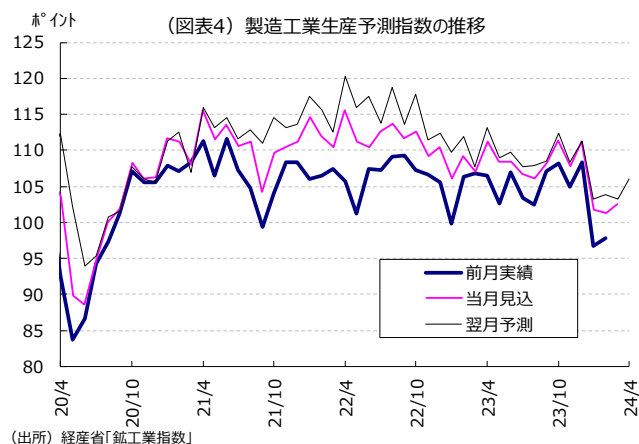
生産用機械工業では、半導体製造装置（前月比▲18.9%、寄与度▲0.68%ポイント）のマイナス寄与が大きかった。元々振れの大きい品目であり、1月は同+16.8%の大幅プラスだった。日本半導体製造装置協会が公表している日本製半導体製造装置の販売高（3ヵ月移動平均）を見ると、2月（暫定値）は前月比+0.8%と4ヵ月連続のプラス¹、前年比でも+7.8%と2ヵ月連続のプラスとなっており、市況の持ち直し傾向は続いているとみられる。実際、3、4月の同品目の生産は回復が予想されている（後述）。景気に対し先行性があることで知られる電子部品・デバイス工業の出荷・在庫バランスも改善傾向が続いており（図表3）、半導体不況の一巡が2024年の半導体関連の生産を支える展開が期待できる状況に変わりはない。世界景気の失速懸念が一時よりも遠のいているほか、国内物価のピークアウト、設備投資計画の進捗もあり、年後半にかけても均せば回復傾向が続くと予想する。



プラス寄与が大きかった1位の業種は化学工業（除.無機・有機化学工業・医薬品）（前月比+3.1%、寄与度+0.15%ポイント）、2位の業種はパルプ・紙・紙加工品工業（同+4.3%、同+0.09%ポイント）、3位の業種は窯業・土石製品工業（同+2.4%、同+0.08%ポイント）という結果だった。化学工業（除.無機・有機化学工業・医薬品）は乳液・化粧水類（同+17.0%、同+0.16%ポイント）だけで増加要因のほとんどを説明できるが、一進一退を繰り返す同品目の最近の状況から見て、一時的な振れの可能性が高い。

3. 3、4月の生産は反動増

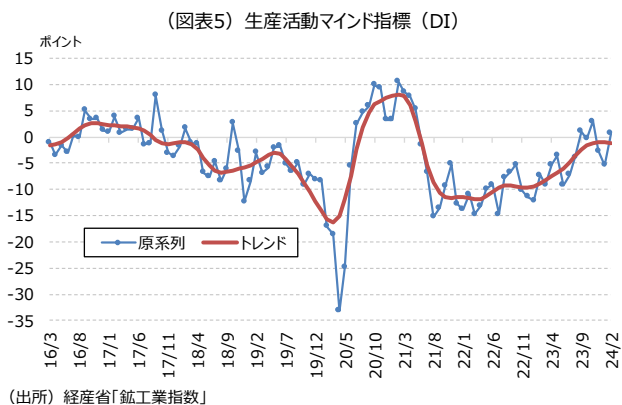
製造工業生産予測指数を見ると、3月は前月比+4.9%、4月は同+3.3%と回復基調が続く見通しになっている（図表4）。3月は輸送機械工業（前月比+10.9%、寄与度+2.07%ポイント）、生産用機械工業（同+8.5%、同+0.99%ポイント）等のプラス寄与が大きい。自動車工業は、生産停止となった工場が段階的に再開されている現状の反映とみられる。生産用機械では、半導体・フラットパネルディスプレイ製造装置、農業・建設・鉱山機械等が寄与しているとのことで、2月の半導体製造装置の大幅減が一時的なものである可能性を示唆している。生産用機械工業は4月も同+20.6%の大幅増産を見込んでおり、寄与しているのは同じく半導体・フラットパネルディスプレイ製造装置のほか、プラスチック・金属加工機械である。経産省が計画値に含まれ



¹ 一般社団法人日本半導体製造装置協会「販売高速報値（3ヶ月平均）半導体製造装置（日本製）2024年2月度」（リリース日2024年3月25日）

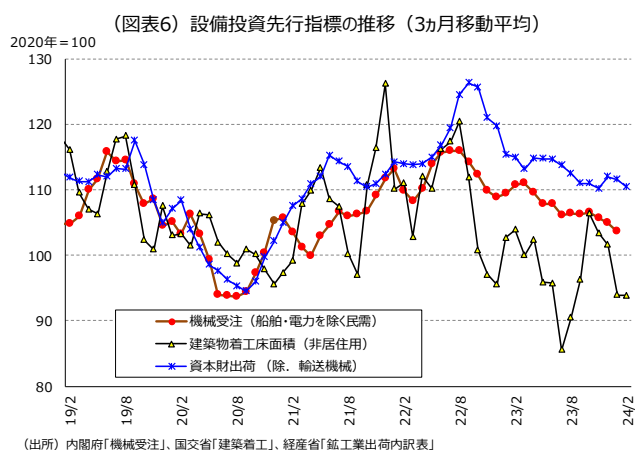
る上方バイアスを補正して計算した3月の予測値は同+4.5%と、製造業生産としてはかなり高めの伸びが予想されている。

企業の生産活動に対する姿勢を示す生産活動マインド指標 (DI) は+0.7と、1月の▲5.4から上昇した。トレンドは▲1.1となった。経産省はDIのトレンドが▲5を下回ると景気後退局面入りの可能性が高いとしているが、過去半年間はこれを上回り、21年5月以来のマイナス圏脱却が目前となっている。ここ数カ月は横ばい圏の推移で、回復傾向は頭打ちだが、不正問題や地震といった特殊要因の影響もあるとみられ、そう遠くない時期のプラス転換が期待できるとみる (図表5)。



4. 設備投資の先行指標はいまだ軟調

設備投資の先行指標の一つである資本財出荷 (除. 輸送機械) は前月比▲4.1%となり、1月の同▲4.9%に続く大幅マイナスとなった (図表6)。他の先行指標を見ると、1月の機械受注 (船舶・電力を除く民需) は前月比▲1.7%と、2カ月ぶりのマイナスとなった。公表元の内閣府は、基調判断を「足踏みがみられる」から「足元は弱含んでいる」へと下方修正している。建築物着工床面積は振れが大きいですが、均せば一進一退の推移で足元ではやや弱含んでいる。



10-12月期の法人企業統計における設備投資が予想を上回る伸びを示したことで、強めの設備投資計画がやっと実行に移されつつある期待が浮上していたが、いずれの先行指標も、設備投資の力強い回復は示唆していない。計画が強い以上、過度な悲観は不要かもしれないが、人手不足や資材価格高止まりなどの供給サイドのボトルネックの影響が予想以上に長引くリスクも念頭に置いておく必要がある。

※本レポートは、明治安田総合研究所が情報提供資料として作成したものであり、いかなる契約の締結や解約を目的としたものではありません。掲載内容について細心の注意を払っていますが、これによりその情報に関する信頼性、正確性、完全性などについて保証するものではありません。掲載された情報を用いた結果生じた直接的、間接的トラブルや損失、損害については、一切の責任を負いません。またこれらの情報は、予告なく掲載を変更、中断、中止することがあります。

●照会先 ●株式会社明治安田総合研究所 〒102-0073東京都千代田区九段北3-2-11 TEL03-6261-6411